

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530560

研究課題名（和文） 遺伝子技術・生殖技術への対応を通して見る〈生命〉観の比較社会的  
的研究研究課題名（英文） A Comparative Research on the Concept of “Life” Reflected in  
Public Attitudes toward Genetic Technologies and Reproductive Technologies.

研究代表者

加藤 秀一 (KATO SHUICHI)

明治学院大学・社会学部・教授

研究者番号：00247149

研究成果の概要（和文）：人々が抱く〈生命〉の観念は、二つの極に引き裂かれているように見える。一方は「連続性」や「つながり」といったキーワードで語られる全体的な観念であり、他方は「かけがえのない命」といった表現に象徴される個体の絶対性を強調する観念である。宗教や思想体系はさまざまなやり方でこの緊張を擬似的に解消しようと試みているが、成功していない。むしろ、これが見せかけの二項対立に過ぎないという観点から、人々の〈生命〉観念を再検討することが必要である。

研究成果の概要（英文）：The concept of “life” that is broadly shared by scientific experts and lay people seems to be torn in two directions: on the one hand, a holistic notion referred to as “*Tsunagari* [continuity]”, and, on the other hand, the individualistic notion such as “*Kakegae no Nai Inochi*,” which literally means “life for which nothing else can substitute.” Religions and philosophies have failed to resolve this tension in various ways. Rather, it is important to reexamine people’s notion of life, questioning the dichotomy between holistic view and individualistic view.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、生命、遺伝子

## 1. 研究開始当初の背景

現代の生命科学、とりわけワトソンとクリックによる分子生物学革命、さらにヒトゲノム計画の成功をもたらした数々の知見は、われわれの人間観や生命観に多大な影響をも

たらしたと言われる。しかし、その影響の全体像を見渡し、さらにその深層にある文化や価値の領域にまで考察を掘りさげる作業は、未だ十分に進められてはいなかった。むしろ、科学史分野においては、生物を生物たらしめ

るものは何かをめぐるアリストテレス以来の知的探究の歴史が跡づけられてきたが、多くの場合、それらは①研究対象について見れば、特定の思想家や科学者が書き残した文献資料にもとづく思想史研究であり、そのような思想言語が理解可能なものとなる条件としてのより広範な大衆的言説についての研究は未だ緒に就いたばかりであり、また、②分析のレベルについて見れば、何が「生き物」「生物」かというレベルはあらかじめ直観的に知られているという前提の上で、そのように把握された生物たちに共通する「生命現象」を探すという構えをとっており、そもそも「生きもの」とそうでないものとを峻別するという作業そのものは不問に付されている。こうした点を補う研究には相応の意義があるものと考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、先端生命科学の医療・福祉実践への応用のなかで、特に遺伝子技術およびそれと関連する生殖技術（着床前診断など）をめぐる社会的応答——政策、関係者による発言、大衆文化における表象——の意味するものを解説し、それが拠って立つ支配的および対抗的な〈生命〉観を明らかにする作業の基本的な見通しをえることであった。ただしその際、上記「背景」の項目にも記した通り、「生物」という対象があらかじめ知られていることを不問の前提とはせず、私たちがどのようにして「生物」と非生物を峻別するのかというレベルの認知活動をも分析対象に含めた。

## 3. 研究の方法

遺伝子技術と生殖補助医療技術に関連する諸分野の大学院レベルの標準的なテキストやNature、Nature Geneticsといった有力な学術誌の注目される論文・記事について、前提とされる〈生命〉を剔抉すべく概念分析を行なった。また人類遺伝学会、生命倫理学会、遺伝カウンセリング学会、遺伝看護学会等の国内・国外における関連学会にも参加し、報告内容について同様の観点から考察した。

大衆文化における遺伝子の表象については、新聞・雑誌における記事や広告、小説、映画といったメディアにおける遺伝子像、〈生命〉観の分析にも着手した。

## 4. 研究成果

### (1) 「生命」概念を訪ねるべき水準

「生命科学」が自然科学の一専門領域として認知されて久しい。このことは、あたかも「生命」という語の指示対象について語りうるのは専門的訓練を積んだ科学者だけであるかのような印象を非専門家の人々に与えるかもしれない。けれども、それはある意味では正しいが、一面的な見方でもある。別の見方をすれば、生命科学者の専門家は、非専門家を含む広範な人々がすでに「生命とは何か」について、あるやり方で知っているということを前提とし、そのやり方を問い訪ねることを通過しなければ、そもそも研究を始めることさえできないだろう。なぜなら生命科学がまさに「生命」についての科学であり、他の（「生命」ではない）何ものかについての科学ではないと万人が認めうるという事態そのものの根拠、すなわち「生命」という対象の画定プロセスが、広範な人々の日常的直観に依存しているからである。ごく一般的に言って、専門科学の概念は非専門家を含めて広範に共有される日常概念を出自とし、それに依存しつつ、それを反省的に精緻化したものであるが、「生命」概念についても同じことがあてはまるのである。しかもそのことは、日常言語と科学言語の関係性を例証するたんなる一事例という地位には収まらず、それを象徴する重みをもっているように思われる。なぜなら、生物と非生物、生き物とそうでないものとの弁別は、人々が世界に対する仕方のきわめて基底的な水準に関わっているからである。

このことは、「生命」をめぐる科学史的研究において採用されるべき視点をも拘束する。現在の日本語で「生命」と表されるべき対象をめぐる原理的考察、すなわちしばしば「生命とは何か」という形式において立てられる問いは、古代ギリシアの哲学者アリストテレス以来今日に至るまで連綿と続けられてきた、というのが一般的な科学史の定説である。ここでそうした研究の価値を否定する意図は筆者には全くないが、そこに一種の原理的困難（おそらく「何かの歴史」という叙述一般に濃淡の差はあれ当てはまる困難）を見出さないわけにはいかない。それは、さまざまな時代・地域を貫く「生命」という対象の同一性をいかにして確保しうるのかということである。たとえば、アリストテレスが

「デ・アニマ」をめぐって記した事柄を、私たちが「生命」論として受け止められるのはなぜだろうか。これらが同一のものをめぐる異なる名前であり、同一のものをめぐる思索の変質として理解されるとしたら、その同一のものとは何だろうか。この問いに答えるには、古代ギリシア人と現代日本人とが明確に共有しているものを見つける必要がある。その候補として最も妥当なのは、「生物／非生物」の弁別の仕方であろう。近年の認知人類学等の成果から、その仕方は人類社会において非常に普遍性が高いと推察されるが、しかしそれが完璧な普遍性ではないことも明らかである。たとえば、西欧世界の、かつ専門家的な知識圏の内部においてさえ、動物を動物・植物と連続的なものとみる博物学的なまなざしと断絶的なものとみる近代生物学のまなざしとの懸隔は大きい。しかもわれわれは、この懸隔への着目をただ博物学から生物学への移行という専門知の変容という水準の記述にとどめておくべき理由をもたない。すなわち、「生命」を論じる哲学者や科学者たちの理論に先だって、かれらがいかなる具体的対象を取り上げて「生命」論の素材としてきたのかを、広範な人々の日常的知識における生物／非生物の弁別仕方にまで下降して明らかにしなければならない。

およそ以上のような観点から、本研究では、まず日本語における「生物／非生物」「生き物である／生き物ではない」「生きている／生きている／死んでいる」「生きている／死んでいる」「生命／物質」等々といった概念対がどのように用いられているかを、生命科学の専門的文献から娯楽映画に至るさまざまな対象の中に探ることを最も基底的なテーマとした。その上で、「生きている」とされる対象について、いかなる意味で「生きている」とされるのかを分析していった。

## (2)「生命」の二面性

本研究では、前項に記した方針に従って資料収集とそこに観察される「生命」概念の分析を進めたが、その作業は未だ十分な達成には至らなかったため、引き続き平成 24 年度から新たな科学研究費による助成を受け、よりの絞った発展的な研究を開始したばかりである。以下では、本研究から得られた多岐に渡る雑多な知見のうち、その新たな助成研究に特につらなる部分について記す。

現代社会において広く観察される「生命」「いのち」や「英 life」の概念には、明らかな論理的矛盾とは言えないが、ある種の緊張関係がはらまれているように見える。

一方で、「生命」という記号は「連続性」や「つながり」といった別の記号と自然に結びついたものとして用いられる。それは「生命樹」のような通時的な連続性を前面に出す場合もあるし、エコロジズムのように共時的な連鎖を強調する場合もある。むしろその両者は排反するわけではなく、むしろしばしば「生命」の価値を際立たせるために結合させられる。たとえばアメリカ映画『ツリー・オブ・ライフ』(テレンス・マリック監督、2011年)は、基本プロットとしては家族間(とりわけ父と息子)の絆を讃えるドラマだが、血縁関係の深遠な意味の淵源を追い求めるかのようにカメラは遙かな時間を遡り、恐竜時代の(CGによる)映像が延々と差し挟まれる。そしてラスト・シーンでは、此岸とも彼岸ともつかない朧気な光に包まれた場所で、世代の異なる者たち、生ける者も死者も、全員が一同に会するのである。主人公の親子を含め、すべての人類、すべての生き物が大きな生命樹(ツリー・オブ・ライフ)の一部であるということを、これほど外連味なく表現した大衆映画は珍しいが、それだけにそのメッセージは私たちの「生命」観の一面を典型的に表している。すなわち、個体や種をより大きな全体的ネットワークの一部に組み込む「生命」であり、その価値の根拠もそのような全体性に求められるのである。

他方、「生命」や「いのち」という言葉は、一人ひとりの人間、一つ一つの個人／個体の「かけがえのなさ」、すなわち単独性・一回性を強調する文脈においても用いられる。かつて、ある裁判の判決において言われた名言として巷間に知られる「人間一人の命は、地球一個分よりも重い」といった命題を典型とするこうした把握は、現代においてはとりわけ医療倫理に関わる場面において行なわれている。

「連続性」と「かけがえのなさ」との緊張関係は、論理的問題であるだけでなく、しばしば実践的にも問題を引き起こす。他方を尊重するために他方を犠牲にせざるをえないように見える場面が多々あるからである。この点に関し、多くの宗教や思想体系が様々なやり方で両者の緊張を解消しようと試み

てきた。その方針は、論理的には、①個を全体に還元する、②全体を個に還元する、③両者を〈止揚〉する、という3つが考えられるが、その中で実際に数多くとられてきたのは第1の方策である。すなわち個体の生命を、あらかじめ至上の価値を与えられた全体的な生命、すなわち生物種や（生氣論的な）自然の一部に組み込むのである。この論理構成においては、そもそも個的な生命に価値があるということ自体が、それが大いなる全体を分有するという認識に還元される。先に触れた『ツリー・オブ・ライフ』式のビジョンはその典型であった。

これに対して、生命を個体においてのみ見出されるものとみなし、各個体や、まして各生物種を通約する存在者を想定しないという方略も論理的にはありうる。この方向を突きつめ、「生命」を徹底して唯名論的に解釈するならば、以下のような見方が提示されるだろう。すなわち、あらゆる生物に共有される生命なるものは実在せず、ただ在るのは生物個体ごとの新陳代謝や自己複製といった営為だけであるという見方である。

だがいうまでもなく、これは生物学の基底をなす「生命」という概念そのものの否定に限りなく近づく立場である。かつてM・フーコーが指摘したように（『言葉と物』）、「生命」という概念はそもそも歴史的に見て各生物種および各生物個体に分有される何ものかを表すものとして発展してきたのであり、それはそのまま近代生物学のほぼ形而上学的前提をなしているのである。そうだとすれば、「かけがえのない生命」といった表現は、「生命」という同じ記号を用いても、「つながり」として表象される「生命」とはむしろ鋭く対立する何かである、ということにさえなるかもしれない。

### (3)近代の「生命」

「生命」「いのち」観の二つの側面の間に見られる上記のような緊張関係は、あるいは一方の正しい見方と他方の誤った見方との間に生じるものにすぎないかもしれないし、あるいはそれを緊張関係とみる見方自体が誤っているのかもしれない。そうした誤りは、生命科学のさらなる発展とその大衆的啓蒙の結果として、いずれは解消されてゆくものであるのかもしれない。だが、そのような予測を急ぐ前に、社会学的視線からは、「生命」

「いのち」という概念そのもののありさまを、より克明に見きわめておく必要があるだろう。上記のような理解は、人々の「生命」概念を探るといふ観点から見たとき、はたして正鵠を得ているのだろうか。

二通りの「生命」概念間の対立は、思想史的には少なくとも西欧中世における普遍論争（実念論と唯名論）との対立に遡る長い歴史をもっているように思われる。そのかぎりでは、それは論理的な矛盾といってよい種類の対立であると考え無理はないようにも思われる。だが他方、両者間の緊張関係は近代社会において極大化した。近代社会において、かつてH. Arendtが『人間の条件』において指摘したように、個々人の独自性とは相対立する全体論的な「生命」という概念（およびその尊重という理念）がきわめて大きな価値を与えられるようになった一方で、他方ではE. Durkheimが『社会分業論』等で先駆的に指摘したように「個」の崇拜という事態もまた同時に進行するという、二面性によって特徴づけられるからである。ここで、仮に、ArendtとDurkheimの双方が正しく、したがって「生命」「いのち」の全体化に向かう「つながり」という意味づけと個別化に向かう「かけがえのなさ」という意味づけとが同時進行的に発展してきたと見ることが正鵠を得ているとすれば、二種類の意味づけの間に見られる緊張関係とは、別個のもの同士の間にも偶然生じたものではなく、まさにそのような緊張関係をはらまざるをえないようなやり方で、ある何ものかが近代において成立してきた、という可能性を示唆する。要するに「生命」「いのち」とは、そもそも二面性をはらまざるをえないような何かである、ということである。M. Foucaultが素描した生権力のメカニズムが、全体性に照準する生政治と、個性性に照準する解剖学政治という二つのレベルから構成されていたことは、近代社会における「生命」概念の二面性と相即しているのではないか。Foucaultの生権力概念、およびそのメカニズムを端的に表す「全体的かつ個別的に」という表現（論文の題名でもある）は、しばしば単なるマクロ／ミクロというありふれた分析の図式にすぎないと誤解されるが、むしろ彼が照準したのは、マクロ／ミクロ、全体／個別、生政治／解剖学政治という二層的な権力テクノロジーや（その一部としての「知」の制度にお

ける) 概念図式が「ありふれた」ものとして通用するという事実それ自体の歴史認識論的条件であった。本研究における「生命」「いのち」概念の二面性という認識は、Foucault が『知への意志』において素描したまま中断した上記のような認識と共鳴するものでもある。

最後に繰り返すならば、本研究は哲学や倫理学プロパーの概念体系を跡付けることを主眼にするものではなく、その前提となる人々の「生命」概念の一見明らかではない体系性を可視化するという、厳密に社会学的な構えを志向するものである。とはいえ、社会学的探究と哲学史的考察はアプリオリに背反するものではない。さしあたり人々の「生命」概念と呼ぶものは、そもそも「全体」対「個」という対立図式でそれをとらえようとするものの方に無理があるような質のものであるかもしれず、そしてそれを剔抉するためには、全体性が個別性かという二者択一的な2つの方向とは異なる哲学史上の試みが、われわれ分析者の側の反省に役するかもしれないのである。そのために、近年の哲学史や宗教思想史研究における、近代的な「個」の概念を相対化し、別の「個」概念の水脈を再照射する試みを参照することが有益であるように思われる。たとえば、初期キリスト教から中世哲学(ドゥンス・スコトゥス)に至る「個」の概念の見直し作業がそれであり、日本では坂口ふみ、坂部恵、八木雄二、山内志郎らによって行なわれている。

しかし、以上のように概略を描くことのできる「生命」観、あるいはより正確には、近代的な「生命」概念からはみ出すような人々の生命ならざる生命概念とでもさしあたり呼んでおくしかないような、いわば「生命」をめぐる〈人々の形而上学〉を克明かつ精緻に解明するという最終的課題は、本研究期間内では完遂しうるものではなく、平成24年度からの新たな基盤研究(C)に、よりのを絞った形で引き継がれた。したがってこの「研究成果」報告は、現時点で得られた認識の要約整理であると同時に、さらなる研究の方向性を提示するものでもあることを付言しておきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 加藤秀一、2011、「自己決定権をめぐる政治学と形而上学」、『ジェンダーと法』査読無、8号、日本加除出版、pp. 132-136

[図書] (計1件)

- ① 加藤秀一他、2010、『生：生存・生き方・生命(自由への問い8)』、岩波書店、pp. 87-115

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

加藤 秀一 (KATO SHUICHI)  
明治学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：00247149

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし